



卓 話



「図書館と犯罪」

東京農業大学教授 中野 捷三氏

大学図書館であれ公共図書館であれ、図書館という施設は、静かな読書環境を提供する安全な施設である、と一般には思われている。子どもが公共図書館へ行くといえば、ひそかに喜ぶ親はいても、行ってもいいがそこは危険なところだと注意喚起をする親はそう多くはないと思われる。



たしかに図書館は静かな読書のための施設であることは間違いないが、同時にさまざまな犯罪の現場でもあることを知る人は多くない。利用者同士のけんか・暴力行為、置き引き、放火、幼児誘拐・監禁・虐待、強制わいせつ行為、覗き、トイレの目的外使用・写真撮影など図書館の利用者を対象とするおぞましい犯罪がここ数年の新聞に報道されている。わいせつ犯罪についていえば、関東甲信越静岡地域の公共図書館の18%で発生している。

図書館職員が対象となることもある。幸いなことに我が国では起きていないが、アメリカでは少なくとも3人の図書館員が殺害されたという報告がある。貸出期間を2週間もすぎているので今後は注意してくださいねと丁寧にお願すると、どうしたわけか急にキレて、あたり構わず大声で職員を罵倒しだす、さらに手にしていた本で殴られたり、ナイフを突きつけられたり、実際に傷を負わせられた職員もいる。社会全体が我慢強くなってきているせいか

利用者はよくキレる。突然怒り出す。第一線にたつて日夜図書館サービスに努めている善良な図書館員としては、たまったものではない。

図書館資料に対する犯罪もある。資料の窃盗、切り取り、破壊、書き込み、落書き、不正売却などである。窃盗あるいは盗難。1990年代なかば東京西郊のある図書館では年間平均24,400冊、金額にして26,000万円の図書が盗まれたという報道があった。その後もこの種の報道は後を絶たない。日本全体で公共図書館は3,100館を超えるから、盗難にあった図書の合計金額は、かなりの額にのぼることはまちがいない。図書館側も対抗策をとっている。正規の貸出し手続きをせずに退館しようとするブザーがなる装置の導入である。これにより、盗難はかなり減ってきてはいるが、皆無というわけではない。第一、この装置の導入には数千万円が必要で、維持管理にも千万単位の予算が必要となる。

さらに、写真やページそのものの切り取り、傍線、意見の書き込み、落書きにいたっては、枚挙の暇が無い。中には、お醤油や油のついた料理本、イヌの歯型をついたペット本、鞆の中に押し込まれたと思われるほど破損した旅行案内書。後で読む人がいることなどは誰も考えないようだ。

<本が泣いています>などと銘打ってボロボロになった本を並べる企画展示を行えば、多くの場合メディアは対応してくれる。が、その見出しは、決まって「図書館利用のマナー教育を」、「マナー向上へ展示」、「マナーは年々悪く」、「マナー低下」、「モラルの欠如」など、礼儀作法のレベルでしかこの問題を捉えていない。

人でもモノでも、それを損壊することはレッキとした<犯罪>なのである。